

生物多様性保全の社内推進のための
「取り組みヒント集」活用の手引き

2012年 2月

企業と生物多様性イニシアティブ(JBIB)
マネジメント・ワーキンググループ

JBIB マネジメントWGとしてのねらい

- 生物多様性保全への主体的な取り組みを企業内で推進するための支援ツールを提供する。
- 各種手法・ガイドラインやJBIBの各WG活動の成果を関係付ける枠組み整理することで、取り組みプロセスの全体像を示す。



➤ ツール：「取り組みヒント集」

先行して取り組んでいる企業へのヒアリング・アンケートをもとに、「なぜ」「何に」「どこまで」「どのように」取り組むべきかについて具体的なヒントと事例を格納した実用的なデータベース。

➤ 補助ツール：「取り組みヒント集」活用の手引き

事業特性に応じて、経営層をはじめとした社内の理解・納得を得ながら取り組みを始めるための手引き書。
「取り組みヒント集」へのガイド的な位置付けのツール。

「取り組みヒント集」の構成

ステップ	課題
Why? : なぜ取り組むのか	<p>A: 事業活動と生物多様性との接点をどのように見い出したらよいか?</p> <p>B: 既に取り組んでいる環境施策との関係をどう捉えたらよいか?</p> <p>C: 経営層や関係部門に対して取り組み意義をどう説いたらよいか?</p>
What? : 何に取り組むのか	<p>D: 生物多様性との関わりの全体像をどう把握したらよいか?</p> <p>E: 取り組み対象をどのように絞り込んだらよいか?</p>
How far? : どこまで取り組むのか	<p>F: 目標をどのように設定したらよいか?</p> <p>G: 関連部門とどのように目標合意したらよいか?</p>
How? : どのように取り組むのか	<p>H: 施策を効果的に進めるにはどうしたらよいか?</p> <p>I: 従業員への動機付け・啓発をどのように行えばよいか?</p> <p>J: 取り組みの進捗確認・評価・見直しをどのように行えばよいか?</p>

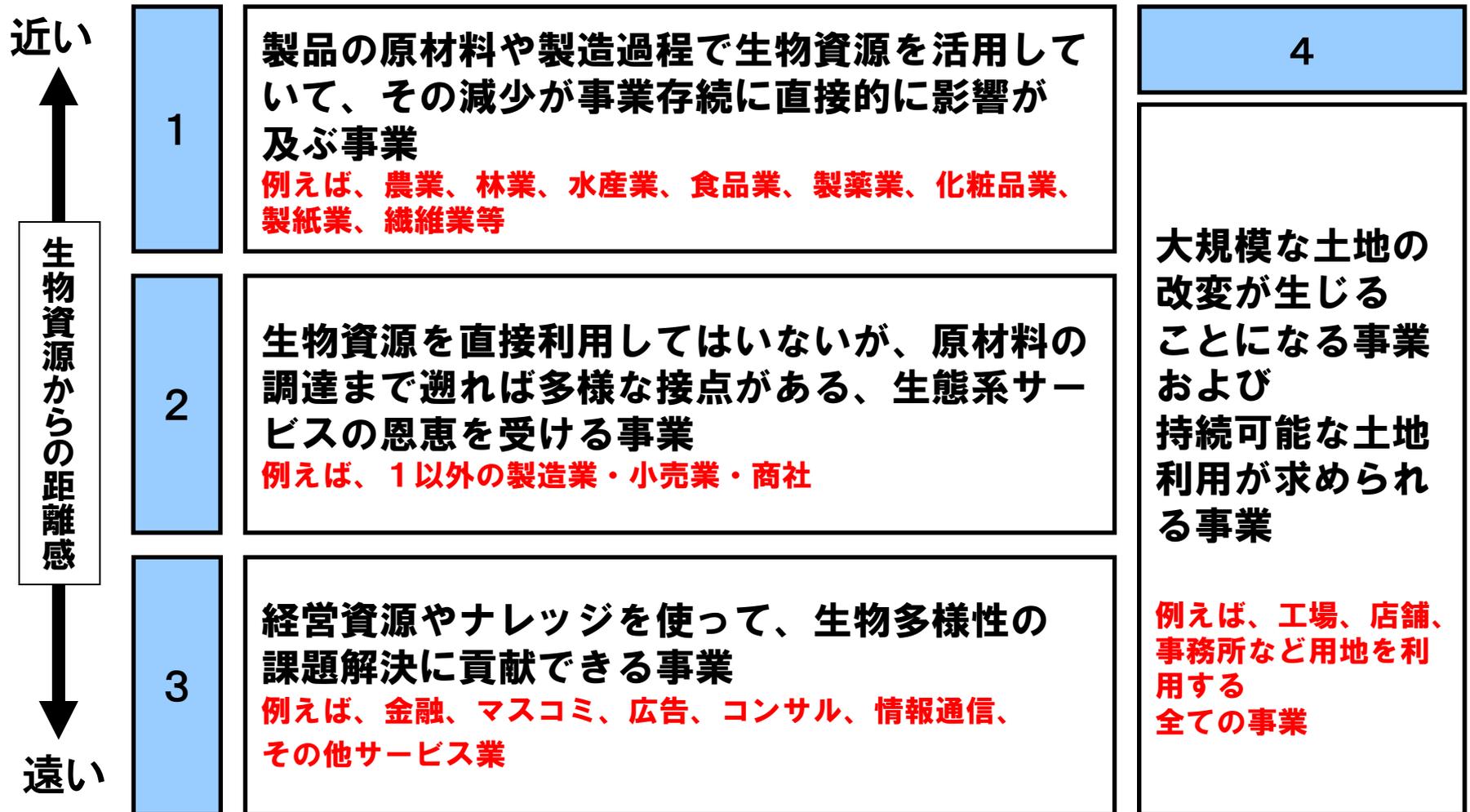
それぞれの課題に対して、複数のヒントと具体的事例を体系的に格納している。

「取り組みヒント集」活用の手引き

- 手順① 4つのカテゴリー分類から自社の事業に該当するものを選ぶ。
 - 手順② 該当カテゴリーの特徴や取り組みポイントを参考に自社の置かれている現状を把握する。
 - 手順③ 該当カテゴリーの「社内推進ステップ」を参考に自社における進め方を考える。
 - 手順④ 「社内推進ステップ」に沿って、ヒント集を参照する。
-

手順① 事業カテゴリー分類

➤ 4つの事業カテゴリーの中から、自社の事業に該当するものを選ぶ。



手順②「カテゴリー1」の特徴と取り組みポイント

1

製品の原材料や製造過程等で生物資源を活用していて、その減少が事業の存続に直接的に影響が及ぶ企業

■ 該当業種

農業・林業・水産業・食品業・製薬業・化粧品業・製紙業・繊維業等

■ 特徴

- ✓ つながり／ 本業と生物多様性とのつながりが直接的でイメージしやすい。
- ✓ リスク・チャンス／ 資源調達に関する国際的規制や将来リスクはある程度予測できる。
- ✓ 外部から／ 国やNGO・NPOから持続可能な施策への早急な対応が求められている。
- ✓ 業界・他社／ すでに生物多様性に取り組んでいる企業の先行事例が存在している。

■ 取り組みポイント

- ✓ 活用している生物資源について客観的、網羅的に現状を把握する。
- ✓ 短期の応急的な対応だけでなく、中長期の本質的な取り組みの両輪で推進する。
- ✓ リスクマネジメントの側面から取り組む持続可能な調達・利用をチャンスにつなげる。

手順②「カテゴリー2」の特徴と取り組みポイント

2

生物資源を直接利用してはいないが、原材料調達まで遡れば多様な接点がある、生態系サービスの恩恵を受ける企業(または事業)

■ 該当業種

カテゴリー1以外の製造業・小売業・商社

■ 特徴

- ✓ つながり／ 自社(自事業)と生物多様性とのつながりの明確なイメージを持ちにくい。
- ✓ リスク・チャンス／ 接点が間接的なのでリスクとして認知しづらい。
- ✓ 外部から／ サプライヤーとの協業による対応が求められる。
- ✓ 業界・他社／ 温暖化、資源循環には着手しているが、生物多様性はまだこれから。

■ 取り組みポイント

- ✓ 製品のライフサイクル全体で「生態系サービス」への依存・影響を考えてみる。
- ✓ 自社の取り組みだけでなく、サプライチェーン全体を見る広い視野で取り組みを捉える。
- ✓ 現在取り組んでいる環境対策を生物多様性の視点で整理する。
- ✓ NPO・NGOなど専門家の意見を取り入れ、中長期的な視点で捉える。

手順②「カテゴリー3」の特徴と取り組みポイント

3

経営資源やナレッジを使って
生物多様性の課題解決に貢献できる事業

■ 該当業種

金融・マスコミ・広告・コンサル・情報通信・その他サービス業

■ 特徴

- ✓ つながり／ 自社と生物多様性とのつながりについて、明確なイメージが持ちにくい。
- ✓ リスク・チャンス／ 生物多様性との接点が間接的(隠れがち)であり、認知しにくい。
取組みによってはビジネスチャンスを生み出す可能性がある。
- ✓ 外部から／ 一般生活者や顧客企業へ直接働きかけることができる。
- ✓ 業界・他社／ 他社との差別化や、ビジネスチャンスが強い動機付けになる。

■ 取り組みポイント

- ✓ 顧客企業・一般生活者への提案・情報提供を通して生物多様性に貢献する。
- ✓ 自社の経営資源やナレッジを活かし課題解決にどう貢献できるかに着眼する。
- ✓ ステークホルダー全体を見る広い視野で、何ができるのか(貢献できるのか)を考える。

手順②「カテゴリー4」の特徴と取り組みポイント

4

大規模な土地の改変が生じることになる事業、および持続可能な土地利用が求められる事業

■ 該当業種

工場・店舗・事務所など用地を利用する全ての事業

■ 特徴

- ✓ つながり／生態系とのかかわり方が直接的であり、影響を与える可能性も大きい。
- ✓ リスク・チャンス／対策をとらない場合のリスクが不明確。
地域・ステークホルダーとの関わりのきっかけとして活用できる。
- ✓ 外部から／周辺地域から、影響の最小化を求められる。

■ 取り組みポイント

- ✓ 「土地利用通信簿」を用いて土地利用状況を確認し、周辺地域との関係性を把握する。
- ✓ 現状の改善だけでなく、潜在的な可能性についても考慮して取り組みを行う。
- ✓ 地域・ステークホルダーとのコミュニケーションの場としての活用を検討する。

手順③④：社内推進ステップ

	社内推進ステップ	ヒント集 該当箇所	事業カテゴリー			
			1	2	3	4
1	事業と生物多様性との接点を「見える化」する。	A	○	○		
2	既に取り組んでいる環境施策との関係を整理する。	B		○		
3	社内で納得・共感が得られる取り組み意義・利点を整理する。	C	○	○	○	○
4	土地利用および周辺環境との関係性の評価を行う。	D				○
5	自社の経営資源やナレッジを活かして出来ることを考える。	D			○	
6	顧客企業の生物多様性に関わるリスクを把握する。	D			○	
7	優先度の高い取り組み課題を絞り込む。	E	○	○	○	○
8	具体的な方針・目標を設定する。	F・G	○	○	○	○
9	社内活動のPDCAを回す。	H・J	○	○		○
10	従業員への理解促進・啓発を行う。	I	○	○		○